

「消すことができないう類似性」 からはじめる

本書は台湾における「外国人嫁」現象の分析をとおして、彼女たちの存在を「社会問題」とみなす台湾社会のありかたや、「ブライド・トレード」研究や「メールオーダー・ブライド」研究にみられる西洋中心主義的なフェミニズムにもとづく問題関心、ひいては研究対象を「他者化」する実証主義に警鐘を鳴らす。「外国人嫁」とは、多くは東南アジア出身の、台湾籍の男性と結婚する女性のことを指す。この結婚にあたっては多くの業者が仲介し、かつ結婚そのものに両国間の経済貿易関係が深くかわり、その点において、留学・移民・労働などの要素によって形成される国際結婚とはことなる。著者はこのような国際結婚のありかたを「商品化された国際結婚」と名付ける。本書ではこの「商品化された国際結婚」の理論的な分析の枠組みの構築がめざされる。

児玉谷 レミ

はじめに、各章の内容を概観する。「第一章 イントロダクション——物語・伝記・学術・実践」では、台湾における「外国人嫁」現象の概説をおこない、そして従来の社会科学における研究対象を「劣った他者」として描き出すスタンスにたいして、幼少期やアメリカ留学時代といった、著者のライフヒストリーの記述をとおして批判する。その批判にもとづき、著者は次のような研究・調査スタンスを提唱する。著者は自己のライフヒストリーを弁証法的にとらえる「自省」によって、研究者と研究対象者の間の類似性を見出し、両者の間の不平等な関係性、そして学問における客観主義崇拜とその暴力に自覚的になることをめざすという。さらに構造が持つ覇権的な力に対抗するために、「実践式研究」（後述）を提言し、「自省」を社会を変えていくための行動に移してい



夏曉鷗著／前野清太郎訳
「外国人嫁」の台湾
グローバリゼーションに
向き合う女性と男性

A5判 420頁
東方書店
[本体 4,500円 + 税]

く必要があると主張する。

「第二章 探索への道」では、具体的な研究内容や調査手法が説明される。さらにフィールド調査の大部分をおこなったという、台湾のなかでも有名な客家地域である高雄市美濃鎮について、その歴史や文化が詳述される。こうした美濃鎮のもつ歴史的・文化的文脈の詳細な説明によって、のちの章で展開されるグローバルな経済構造に着目した「外国人嫁」現象の分析とその記述がゆたかさを増しているといえよう。

第三章から第五章にかけては、「真実の社会的構築」として、台湾経済貿易代表処の職員、結婚の当事者である「外国人嫁」と台湾人夫、マスメディアそれぞれの立場からの「外国人嫁」問題の構築が、当事者へのインタビュー調査やメディア報道の資料分析などをおして描かれる。著者は、社会構築主義の立場から、社会問題を客観的に実在するものではなく構築されたものとしてとらえ、上述した三つのアクターの言説を分析することをおして、それぞれの立場からどのよう

に問題が「真実」として構築されていくかを分析する。

「第六章 資本のグローバル化と商品化された国際結婚」は、「外国人嫁」現象を低開発国の女性が相対的に高開発国の地域に嫁ぐというグローバルな現象として位置づける。そして国際結婚による移動の背景にあるとされるグローバルな

経済構造やそうした構造への結婚当事者たちの解釈と反応に焦点をあてる。ここで提示されるのは資本主義発展の副産物としての国際結婚という見方である。資本主義の発展は中心国が自国の利益のために周辺・半周辺の国々の資源や労働力を搾取するというような不平等な国際分業を生じさせ、それぞれの国家内に「ねじれ発展」がもたらされる。この「ねじれ発展」とは次のようなプロセスで進む。中心国は資本の投資先と市場の拡大をもとめて、資本主義の初期段階にある周辺・半周辺国家に対し投資の開放をもとめる。この圧力は周辺・半周辺国家の国内資源の分配をゆがめ、自国の投資環境を改造して外国資本を受け入れる一方で、農村経済の破綻により流出した大規模な労働力を輸出する。こうした資本のグローバル化と労働力の自由化は半周辺国家に、工場的大量閉鎖と労働者のリストラをもたらし、自国の高賃金・非熟練労働力は移民労働者によって代替される。周辺国家においても同様の現象が起こり、さらに外国資本の移入によって自国の工業は発展を遂げられず労働条件が悪化する。このような「ねじれ発展」によって周縁化された男女がもつた活路が「商品化された国際結婚」なのだという。生存戦略としての国際結婚の指摘にとどまらず、著者はこうした国際結婚によって資本主義が再生産・強化されるさまも指摘する。

「第七章 識字の教室、姉妹の教室」では、著者が運営する「外国人嫁識字教室」での実践や経験を分析した章である。この教室は、著者が第一章で提案した「実践式研究」として位置づけられる。この教室はパウロ・フレイレの解放教育の概念に依拠しながら、「外国人嫁」たちが中国語を学ぶこととおして自ら声をあげて権利を獲得できるようにすることがめざされている。この教室で得られた分析材料をもとに、著者は、行動や参加によって対象との信頼関係を構築してこそ得られるデータがあり、また構造のダイナミズムをとらえられるとして、従来の実証主義的なアプローチを批判している。

「第八章 課題・情勢・展望」では、西洋的な個人主義、および中産階級的なイデオロギーにもとづいたフェミニズムへの批判が展開される。批判の主眼におかれているのは、「外国人嫁」を抑圧に気づかない無知な存在とみなし、個人主義を啓蒙することによって彼女たちは解放されるとするような見方である。おもに結婚にたいする価値観を分析することをおして、著者はそのような見方を批判していく。そして、「外国人嫁」たちの語りの分析をおして、彼女たちが、結婚におけるドメスティック・バイオレンスの可能性を認識しており、かつして無知な存在ではないことや、彼女たちが結婚関係で困難におちいったときはコミュニティの人間関係を

頼って問題解決を試みていることから、個人主義はかえって「外国人嫁」たちを孤立させ危険におとしいれてしまう可能性があることを指摘する。

最後に、翻訳書である本書は「日本語版のための補章」が付されている。この章では、「外国人嫁」現象をめぐる台湾の状況が、日本語版の読者にもわかるように詳しく記述されている。この章で着目すべきは二〇〇二年ごろから新たにみられるようになった、「外国人嫁」の子どもたちを「新・台湾の子」として重視し、積極的に介入していく政府の傾向の指摘であろう。「新南向政策」のもと、東南アジアへの市場拡大のための「リーダー」として、それまで軽視され、「国民の質を下げる」と疎まれてきた「外国人嫁」とその子どもたちが重視され始めたのである。

ここまで内容を概観してきたが、本書は、著者が新たな試みに挑戦していることが伝わってくる労作である。本書では、実証主義への批判的立場がたらぬかれており、研究者にとって研究対象は特異で劣った他者などではなく、それぞれの経験にさまざまな類似性があること、すなわち「消すことができない類似性」が存在することの指摘や研究者の特権的立場への問題提起など、従来の実証主義が問うてこなかったものを突き付けている。

荒川清秀 著
**日中漢語の
生成と交流・受容**

—漢語語基の意味と造語力の観点から—
日中両国語に共通する漢語がいかに生じ伝わり共通になったかを造語における語基の問題から探求。

A5判456p. ■4800円

木村英樹 著
**中国語文法の
意味とかたち**

—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究—
現代中国語の文法的現象から文法の意味と形態、文法の意味と構造的対応のありようを明らかにする。

A5判362p. ■3800円

楊凱榮 著
**中国語学・
日中対照論考**

“了”、スコープと焦点、数量強調、全称表現、ヴォイス、構文の意味と構文の相違、語用論をめぐる17編。

A5判376p. ■4600円

広東語初級教材
(重版出来)

吉川雅之 著
**香港粵語
[基礎会話]**

日常会話に不可欠な定型表現の習得から始める。丁寧な文法解説による基礎表現学習教材。

A5判/CD-ROM1枚付 ■2800円

**香港粵語
[基礎語彙]**

厳選1300の基本語に熟語・コロケーション・例文を挙げ、見出し語と用例全てに発音記号を付す。

A5判/CD-ROM1枚付 ■2500円

白帝社 ※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

興味深い論点も多い。たとえば第六章では、台湾における国際結婚の現象がグローバルな資本主義経済のもとで周縁化された男女のいわば「生存戦略」であることを指摘している。これは、台湾人夫と「外国人嫁」が、公的機関やメディアが描出するような台湾社会からはじきだされた敗者もしくは「台湾に害をなす」他者でも、そして構造になされるままの「弱者」とするのではなく、構造から制約を受けつつもエージェンシーを行使する存在として示したといえる。また、パウロ・フレイレの議論に依拠しながら「外国人嫁」を取り巻く状況やアカデミズムの問題の要として提起される、「自己」と「他者」の間に境界を引き、後者を劣るとみなす行為である「他者化」も興味深い。「他者化」がマイノリティを分断する効果をもつことを指摘したのち、その「他者化」を

台湾人夫と「外国人嫁」の問題とするのではなく、研究者の態度の問題にさしもどしたことも、研究者と研究対象者の類似性を重視しながら従来の実証主義を批判しようとする著者の意志がくみとれる。

以上のように本書のスタンスや提示されている論点には興味深いものが多いが、いっぼうで新しい試みにはつきものの、未達成点もいくつかみられる。

まず、「自省」の記述の仕方に検討の余地があると思われる。現状では、著者の経験と「外国人嫁」の状況が等置されている印象を受け、台湾人女性であり、高等教育を受け、大学の教授という社会的地位をもつといったような、「外国人嫁」にたいして著者が持つ特権が見えづらい。著者は類似性を示すことで、自己と他者の関係は差異にもとづいた階層関

係ではなく、つながりにもとづいた「横断性」のある関係と提唱するが、それは、ともすれば、抑圧する側の経験を過度に普遍化し、特権を不可視化する危険性を孕んでいる。したがって、著者と「外国人嫁」それぞれの経験と状況が抱える普遍性と特殊性に注意を払いながら「自省」は記述されるべきであり、それによって著者と「外国人嫁」の間に横たわる差異を矮小化することなく「横断性」を示すことができるのではないか。

次に、西洋と東洋を対置させる枠組みによって、やや議論が単純化している印象を受ける。たとえば華人文化がさすものの曖昧さや、第八章における個人主義こそがドメスティック・バイオレンスの状況を悪化させるといような論調にそれがみとれる。おそらく、これは著者のアメリカ留学時代における、西洋中心主義に対抗しなければならなかった状況が大きく関係していると思われる、また著者自身デル・ロザリオの「逆転したオリエンタリズム」を参照しながら、マイノリティ文化を白人文化に優越させる描き方を批判していることから、東洋と西洋の二項対立的な議論におちいることに問題意識を持っていると考えられる。著者がその問題意識を反映させ、東洋と西洋の二項対立におちいることなく、いかに西洋中心主義を脱構築していくのか今後が期待される。

最後に、本書において台湾人女性の声の記述が相対的に少なく、登場する台湾人女性も公的機関の職員であったり「アメリカの影響を受けた台湾のフェミニスト」であったり、やや限定的なことが気になる。とくに台湾における結婚市場にかなする台湾人男性たちの語りの位置づけをあきらかにしたり、彼らの解釈を相対化したりするため、そして「外国人嫁」と比較し「階級」やエスニシティの作用を分析したりする対象として、台湾人女性の声が必要だったのではないだろうか。

以上のように、本書が抱えている限界について記述してきたが、これは著者の研究そのものや研究スタンスが洗練されていく途上であることを示しているように思う。日本語版のための補章で言及されていたが、「外国人嫁」とその子どもにたいする対応が変わってきた現在、おそらく本書に加筆されるべき現象も多くみられているであろう。そのこともふまえ、著者が今後もぜひ研究をつづけ、その成果を報告してくれることを期待する。

(こ)だまや・れみ 一橋大学大学院社会学研究科